

# 飯島半十郎の生涯と思想 (その二)

『幼稚園初歩』の著者——

小林 恵 子

はじめに

明治の半ばごろまでに幼児教育の分野に先駆的役割を果たした人物のなかには、その人のことが殆んどわからないまま現在に至っている人が少なくない。飯島半十郎もその一人である。

おそらく誰からも、この人のことが解明されることなく今日に及んだのであって、倉橋惣三は『日本幼稚園史』に次のように書いておられる。「飯島半十郎とは如何なる人であつたらうか。是非此の人について知りたいと思つたのであるが、一向にわからないので、残念なことと思つてゐる。種々の事蹟から考へて見ると、幼稚園のことについては、かなり造詣が深かつたらしい。当時の幼稚園に関する書の出版に当つて度々その名が出て来て居る。即ち『幼稚園』中巻下巻は同氏の校であり、カルキ

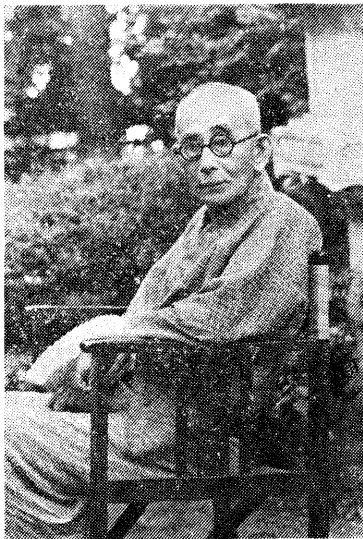
ン氏庶物指教及び幼稚園智恵のみちびきも、氏の校訂であり、

今又、この幼稚園初歩全四冊の著者であることを思へば、直接幼児教育に当られたかどうかは不明であるが、兎に角関信三氏につぐ、当時の幼児教育の研究者では無かつたかと思はれる。<sup>(1)</sup>

私が飯島半十郎について調査したきっかけは、この春、日本らいぶらりから出版された『明治保育文献集』で彼の著書『幼稚園初歩』、『幼稚園智恵のみちびき』の解説を依頼されたことから始まつている。最初は全く手がかりもなく人名辞典をあれこれ調べているうち、『浮世絵事典』<sup>(3)</sup>上巻に飯島虚心の名前が掲載されているのを知つたのである。さらに『書物展望』の雑誌に大曲駒村と玉林晴朗が浮世絵研究の先覚者としての虚心の生涯を記していることもみいだすことができた。調査をすすめるうちに、飯島半十郎の著わした本があちこちから発掘され、その分

野が余りに多方面に及んでいるため、私は自己の能力の限界を感じないわけにはいかなかった。しかし、このたび思いがけず半十郎の孫に当たる方にお会いできて、半十郎の書いた文書や不許他見の「言志」や漢文による「独言」などの書を手にしたとき、誰かが彼のことを書いておかなければと痛感したのである。そのいきさつを述べておきたい。

ある日、私は彼の墓があるという小石川の伝通院の地中、真珠院を訪問した。あいにく住職は不在であったが、夫人が過去帳を探して下さって、飯島家の墓は昭和五十一年二月に伊東へ移されたことが話された。飯島家の過去帳には「明治三十四、丑年八月一日 清閑院靈簪虚心居士」と亡くなった日が記されている。墓を移した飯島威次郎氏の住所（伊東市末広町）が判明し、まもなく飯島家を訪問する道が開けたことは、本当に幸運なことであった。威次郎氏は半十郎の孫に当たるわけであるが、半十郎の息子四十八<sup>よそは</sup>には実子がなく養子として迎えられた方である。郵便局に勤めておられるという。孫が大学というからかなりの年配である。「父（四十八）は大変立派な人で、器用で篆刻を趣味としていた」と話されたが、半十郎の亡き後へ養子にきたので直接に知らないが、父を通して時々話をきいており、祖父は大変な酒のみで、父はそのためか飲まなかった」と



▲飯島四十八氏  
半十郎の面影がしのぼれる



▲飯島半十郎の肖像画(石版摺)

言われる。日本鉄道に勤務しておられた四十八の晩年の写真は、その父、半十郎の面影を留めているようである。半十郎の写真は無く、彼の肖像画（石版摺）だけが残されていた。

### 半十郎の生涯

波瀾に富んだ彼の生涯を詳細に調査し考察することは、私の如き浅学な者には限界があることを最初からおことわりしておきたいと思う。彼の生涯は実に幅広く多方面で活躍しており、私の調査しえたのは半十郎のある一面を捉えたに過ぎない。

彼の生涯は、別表で示すように大きくみて三つに区分されようかと考えられる。一期は幕末から維新にかけて世の中が最も変動した時期であり、半十郎の青年期に当たる。二期は多方面に活躍し文筆活動を行なった壮年期で、幼児教育に関する文献や教科書など数多くの教育関係の書がこの時期に編纂されている。三期は浮世絵の研究に専念する孤独な晩年である。

半十郎は天保十二年十月十七日に生まれ、明治三十四年八月一日六十一歳で没した(1841~1901)。飯島虚心、曙里、局外閑人とも号した。

### (一) 生いたち

江戸生まれというが、その場所はあきらかでない。彼の幼年時代の記録は何も残っておらず、ただ玉林晴朗が『浮世絵研究の先覚者飯島虚心』の書に彼の著書『天言筆記』について、「此の書は藤岡屋由蔵の日記百八十有余卷の中から虚心が必要のものを抜萃して五卷となしたもので、由蔵は神田旅籠町で書肆を営み日々店頭に座し其の聴書を記してゐたもので虚心は下谷摩利支天横丁に住み家も程近いので常々幼時からそれを見て知ってゐた」<sup>(7)</sup>とあり、下谷摩利支天は上野の松坂屋の北側あたりであるから、この方面で育つたものと思われる。

半十郎の生家は幕臣で父善蔵は和宮様天璋院様御広敷番之頭をつとめたほどの人で、世禄高百俵五人扶持<sup>(8)</sup>を得て居り、経済的にも豊かな家庭に育つたことが理解される。また母の父は鈴木安房守で勤士並寄合で和宮御降嫁の際に御供を申し上げた人である。半十郎には弟が二人、姉妹が三人あり彼は長男であった。彼の学問は昌平黌と講武所で学んでおり、昌平聖学科挙の人名帳に文久二年正月乙科の二十番目に「佐渡奉行支配組頭善蔵内 飯島半十郎」とある。乙科というのは成績を示したよう<sup>(9)</sup>で甲に続く良い成績をとったこと、またこの頃に父善蔵が佐渡奉行支配組頭であったことがあきらかである。

年		代	半十郎の生涯と著作 (★著書 ●校)
I 期	1841	天保12年	江戸に生まれる。(長男) 父：善藏(幕臣, 静岡県土族) 母：ゆき(鈴木安房守の娘, 幕臣) 弟：2人 姉妹：3人
	1861 (20歳)	文久2年	昌平黌卒業。講武所に学ぶ。 函館奉行江戸役所書物御用を勤める。
	1866	慶恵2年	成島柳北の配下, 太田の陣屋にあって騎兵指図役となる。
	1868	明治元年	回天丸に乗り仙台へ脱出。 父, 弟と函館へ。小金ヶ原の開墾に従事。
II 期	1873 (32歳)	6	「東京新報」の編輯(明6.2~6.6)
	1875	8	「洋々社談」の会員, 編輯(明8~16年) 文部省 報告課 雇入。
	1876	9	★「日本地理全誌」巻1~5(二書堂) ★「碎玉」上・下 ●「幼稚園」ロンゲ著, 桑田親五訳の巻中・下の校(文部省)
	1877	10	●「加爾均氏庶物指数」カルキン著, 黒澤壽任訳の校(文部省) ★「清響」(修身及教訓)(尚友堂)
	1878	11	★「日本地誌」畿内の部(虚心堂) ★「輿地誌略字引」(内田正義刊) ★「日本暗射地図」(文部省)
	1879	12	山林局御雇申付 ★「木曾沿革史」(未刊)
	1880	13	●「文部省百科全書」記述考 チェンバース編 蒸気篇, 陸運の校
	1881	14	★「初学山林書」上, 下(福田仙蔵刊)
	1882	15	●「文部省百科全書」記述考 チェンバース編 温室通風点光の校 ★「初学家事経済書」上, 下(虚心堂, 尚友堂)
	1884	17	★「初学地理書」巻1~4(三書堂)
	1885	18	★「幼稚園初歩」巻1~4(青海堂) ★「幼稚智恵のみちひき」上, 下(修静館)
		19	★「小学日本地理教授書」上, 下(青海堂)
		23	★「家事経済書」博文館叢書 結婚 妻：不詳 長男：四十八(明8.4.15生) 長女：なつ(養女にだす) 次女：まつ
	III 期	1893 (52歳)	26
		27	★「浮世絵年表」 ★「歌川列伝」三冊(明27)
		?	★「歌川雑記」 ★「河鍋曉齋翁傳」五冊 ★「日本絵類考」(明27.1) ★「蒔絵工程」 ★「図絵寶鑑」 ★「蒔絵通覧」 ★「蒔絵師傳」三冊(明25~26) ★「言志」(明28.6) ★「落首集」二十冊
1901		34	病没(61歳)
1912		45	★「天言筆記五巻」新燕石十種第一(紙魚堂)
1941		昭和16	★「浮世絵歌川列傳」(敵傍書房)

注 —— 線は幼児教育に関する文献

## (二) 指導者、中村敬宇

青年期に半十郎が最も大きな影響を受けたであろうと考えられる人物に中村敬宇（正直）があげられる。彼が勉強した昌平費は江戸時代の最高学府であり、徳川幕府の直轄学校であった。入学は幕臣が原則とされ、学科の中心は朱子学であった。教官は御儒者と同見習（教授、助教にあたる）があり中村敬宇は文久元年二月御儒者見習となり、翌二年、三十一歳で御儒者となり、昌平費内の官舎に移り住み、林氏を輔佐し運営に当たっている。<sup>(9)</sup> 漢学はもとより広く蘭学、英学に通じ、広い視野と高い品性をもつ若い敬宇が、昌平費で学ぶ塾生たちに大きな感化を与えずにはおかなかったと考えてよいであろう。敬宇は天保三年（一八三二）生まれで半十郎より九歳年上であった。共に江戸生まれ、静岡県士族であったことから深い師弟関係が昌平費時代から始まったものと考えられる。半十郎の号「虚心」は敬宇が彼のために聖書から選び与えたもので、中国訳の聖書で「虚心者福矣以天国乃其国也」(マタイ伝第五章三節)<sup>(10)</sup> からとったものである。敬宇は東京女子師範学校の摂理となり幼稚園開設の建議を行ない、わが国幼稚園の創設に大きな貢献をした人である。女子教育、幼児教育、訓盲院の設立など幅広い社会的活動を行ない、明治初期の思想界にあっても福沢諭吉と並び

称せられる人物であった。幕府から英国留学生取締として渡航、『自由之理』『西国立志編』を刊行、洋学塾「同人社」を開き、「明六社」結成に参加するなど、当時の青年層に多大な教育的感化を与えている。こうした敬宇の生き方や考え方は、半十郎の生涯に大きな影響を与えている。『幼稚園初歩』『日本地理全誌』の序は敬宇が書いており、「東京新報」という雑誌は敬宇の支援によって編輯したものである。

## (三) 成島柳北の影響

中村正直とは違った面から、半十郎の生涯に大きな影響を与えたもう一人の人物は、成島柳北ではなかったかと考えられる。柳北は天保八年江戸、浅草生まれ、彼より四歳年上で、幕臣の家に生まれ、昌平費に学び奥儒者となり將軍侍講をつとめた。慶応二年、横浜太田陣屋に赴任し騎兵頭となったが、このとき半十郎は彼の配下にあった。柳北は早くから世界の大勢に眼を開き、明治五年に東本願寺法王現如上人に随行、ヨーロッパに旅をしている。このときの一行五人に東京女子師範学校付属幼稚園の摂理となった関信三が一緒であったことは興味深い。<sup>(11)</sup> 仏、伊、英、米を訪問し知見を広めて帰国した彼は、維新後、新聞記者となり、随筆家・詩人としてジャーナリストの世界に

活躍した。半十郎と彼の出会いはいは昌平齋であり、太田陣屋で彼の部下であったことから青年期に影響を与えたものと考えられる。晩年、半十郎が世事からはなれ浮世絵の研究にとりくむのであるが、これはどこからきているのであろうか。そこには若い日の柳北の影響を考えざるを得ないのである。前田愛は『成島柳北』の書で、柳北の生き方は「豊饒で美的に洗練された江戸の文華をぞんぶんに享楽しつくした青年時代の体験ときりはなすことができない」柳北は遊びにおける精神の自由に触れていたのだ<sup>(1)</sup>と記している。こうした自由な遊人、柳北の生き方は半十郎の青年時代に少なからず影響を与えたに違いない。中村正直とは性格を異にする儒者、文人としての柳北は、彼の生涯にあっては別の角度から彼に影響を与えたのであって、そこには洗練された美への目覚めが日本の浮世絵と結びついていったのではあるまいか。半十郎の妻が戸籍で不詳となっていることや、娘おなつを浅草の任人に養女にだしていることなど、不明な点が多いことからみても、半十郎は柳北と同様、江戸の下町情緒や文化をぞんぶんに享楽しつくした青年時代を体験した人であって、それが浮世絵の研究に結びついていったものと考えざるを得ない。そして彼の著わした『幼稚園初歩』のなかに江戸庶民の生活の知恵や遊びが生き生きと描きだされているの

である。たとえば一本の紐や手ぬぐいから無限の変化がつくりだされていくところに、江戸文化のひとつのあらわれをみるこ  
とができるのであるが、彼は子ども遊びの中にこれを見ていたのである。(つづく)  
(国立音楽大学)

註(1)倉橋惣三 新庄よしこ共著「日本幼稚園史」昭・31 フレ

ーベル館 378頁

(2)岡田正章監修「明治保育文獻集」別冊

(3)吉田映二編「浮世絵事典」

昭・46 画文堂 上巻 39頁

(4)大曲駒村著「飯島虚心翁」『書物展望』昭・9

(5)玉林晴朗著「浮世絵研究の先覚者飯島虚心」『書物展望』

昭・13 7月号

(6)真珠院の任職、石井俊瑞夫人

(7)玉林晴朗著 前掲書 28頁

(8)飯島威次郎氏宅に残されている文書による。

(9)高橋昌郎著「中村敬字」昭・41 吉川弘文館 9～10頁

(10)慶応二年(同治五年)香港英華書院発行の「新約全書」

(11)津守真記「関信三略年表」参照

(12)前田愛著「成島柳北」昭・51 朝日新聞社 7頁、18頁